

「樹木希林—必要のない人間なんていない—」

先月、近畿学校医研究会に参加しました。もちろん WEB です。

最終の講演は「発達障害児と不登校について」です。

講師の先生は児童精神科医で専門的な話や学術的な分類と対処法について説明されていたのですが、全く面白くありません。もちろん私の勉強不足が原因でしょうが、すたとんと頭に入ってこないのです。

後日、ロータリーでいただいた「抜粋のつづり その八十」を読んでいると、素晴らしい言葉に出合ったのです。

不登校新聞(この様な新聞があることを初めて知りました)の編集長 石井 志昂(いしい しこう)氏が樹木希林さんにインタビューした時の言葉です。

石井さんが「学校で苦しみ、なんとか逃げてきた自分が”不登校児”として周囲から責められ、生きている価値、存在している理由が分からないと悩んだりしている子どもたちがいます。

その子たちは、いろんな反応を見せます。自分で髪の毛を抜いたり、周囲の目が怖くて昼夜逆転の生活をしたり、拒食障害や苦しみが強すぎて自殺したりなどです。

夏休み明け、子どもの自殺が最も多くなります。」

といました。すると希林さんは「私が劇団に入ったのは十八歳のとき、ぜんぜん必要とされない役者だったの。美人でもないし、配役だって”通行人 A”とかそんなのばかり。

でも、その役者という仕事を五十年以上、続けてこられてたの。だから9月1日がイヤだなんて思ったら、自殺するより、もうちょっとだけ待っていてほしいの。

そして、世の中をこう、じっと見てほしいのね。あなたを必要としてくれる人や物が見つかるから。だって、世の中に必要のない人間なんていないんだから。

私も全身にガンを患ったけど、大丈夫。私みたいに歳をとれば、ガンとか脳卒中とか、死ぬ理由はいっぱいあるから。無理して、いま死ななくていいんじゃない」と言ったのです。

希林さんの言葉は「生きて」と聞こえます。

死にたい人に「生きていてね」という言葉は、本人の苦しみを否定することになると教えられてきた石井さんは、衝撃を受けました。この様な、真っ直ぐに「生きて」と伝えることが、本当の意味で人を前向きにさせてくれるのではないかと感じたそうです。

最初の医学の話しに戻ります。

発達障害や不登校に専門的なカウンセリングや薬物治療は必要ですが、その前に、対峙する人には人生を語れるような人となりが必要ではないかと思うようになりました。

大変難しいことですが。

